

金島書 泉

只言葉

又、西の山麓を見れば、人家薨を並べ、都と見え
たり。泉と申所なり。これは、古、順徳院の御
配処也。然れば、御製にも、限り有れば、萱が
軒端の、月も見つ、知らぬは人の、行末の空。実
にや、十善万乗の御聖体、さしも余薫の御蔭とて、
其の名も高き山桜、梢の花と栄えん。雲居の春の
長閑さも、今さもして、天離かる、鄙の長路の、

御住ま居、思ひ遣られて、傷わしや。所は、萱
が軒端の草、忍ぶの簾、絶えぐ也。

下歌う
夕立ち落つる庭潦、是もや泉なるらん。

上
下潜る、水に秋こそ、通ふらし、く、掬ぶ泉の、

手さへ涼しき。折々に、御衣のたも心や萎れけん。

実にや人ならぬ、岩木も更に、悲しきは、美豆の

小島の、秋の夕暮れ、と詠めさせ給しも、御身の

上と成りにけり。

下
檜摘む、山路の露に、濡れにけり、暁起きの、

墨染め袖も、同じ、苔席の、誰ぞ、錦の、御褥

ならん、傷わしや。

上
薪樵る、遠山人は、帰る也、里迄送れ、秋の

三日月も、雲の端に、光りの影の、浮き世をば、

君とても、免れ給はめや。さて事、言ふならく、

奈落の底に、入ぬれば、刹利も首陀も、変はらざ
りけるとなり。実にや、蓮葉の、濁りに染まの、
心もて、泉の水も、君住まば、涼しき道と成りぬ
べし、く。

〔口訳〕

又、西方の山麓を見やると、人家が薨を並べてたち列なつて、
この国の都と思はれる眺めである。泉と申す所である。これは

往昔、順徳院の御配処であつた所である。それで御製にも、「限
りあれば萱が軒端の月も見つ、知らぬは人の行末のそら」と御
詠み遊ばされたのである。まことに、十善万乗の御聖体を迎へ
申して、さしも有難い余薫の御蔭を蒙つたといふので、世に名
高い此処の山桜は、梢の花に益々其の栄えを見せることであら
う。雲居の春の長閑さを思ふにつけ、今かやうにして、遠境辺
土の御住居を拝しては、御心の程も拝察せられて、まことに御
痛はしいことである。所は萱草が生ひしげり、草葺の軒端には
忍草の簾も、絶えだえの有様である。夕立が降り落ちて、庭に

は庭漚が流れる。これも泉といふべきであらうよ。「下くぐる
水に秋こそ通ふらし、掬ぶ泉の手さへ涼しき」といふ古歌があ
るが、泉を掬び給ふ御手の涼しい折々には、御衣の袂は御涙に
ぬれ萎れた事であらう。ほんに思へば、「人ならぬ岩木もさらに
悲しきは、美豆^{みづ}の小島の秋のゆふぐれ」と遊ばされた御製も、
遂に御身の上の悲しさとなつてしまったことである。「檣摘む
山路の露にぬれにけり、暁起きの墨染の袖」といふ歌があるが、
その墨染の世捨人同様の苔筵、これが錦の御褥であつたらうな
どとは、誰が思ひかけようか。誠に御痛はしい限りである。「薪

こる遠山人は帰るなり、里まで送れ秋の三日月」と御詠み遊ば
した秋の三日月も、雲の端に物憂げな光を放つてゐる。この浮
世の儚さは、万乗の大君とても御のがれになることは出来ない
ことであつた。それで「言ふならく奈落の底に入りぬれば、刹
利も首陀もかはらざりけり」と言はれてゐるのである。まこと
に、この泉の水も、大君が御住み遊ばせば、「蓮葉の濁りにし
まぬ」とよまれた清らかさで、涼しい浄土となることであらう。